

## ■『惜別の歌』の由来の語り

藤江英輔氏 講演 参考版（勝山 記）

\*2023 年=令和 5 年 7 月以降改定の文面です。

（参加者全員で肩を組み 1 番の歌詞を合唱した直後からナレーション開始）

今 皆で歌っておりますこの歌『惜別の歌』は、私達 中央大学に学んだ者にとりまして『蛍の光』に代わる歌とされ、親しい友と別れる時、一緒に肩を組んで この歌を歌い 別れを惜しみながら また会おうと誓って別れる慣わしとされております。

時は、1944 年 昭和 19 年の夏、自由な学問の場であるべき大学の庭にも 太平洋戦争の荒波はヒシヒと押し寄せ、遂に 学徒動員の断が下ったのです。

すべての大学は閉鎖され、私達の先輩である中央大学の学生は、東京・板橋区にあった軍の工場に配属され他の大学の学生らと共に 武器や兵器作りに従事する毎日となりました。

しかし、秋が過ぎ 冬に入り 戦局は一段と厳しさを増し、工場に動員された学生にも 軍に入隊するよう命じる召集令状が次々と届くようになってきたのです。

工場内で その配達係も務めていた私達の先輩は、一緒に働いていた仲間の学生が、召集令状を受け取り、『明日をも知れぬ身』となること 言い知れぬ思いを抱き、島崎藤村作『若菜集』の一節に メロディをつけ『惜別の歌』として口ずさむようになりました。

その歌が、工場の中で 静かに広まって 多くの人に歌われるようになり、 戦地に赴く学生を見送る時せめてもの饂（はなむけ）にと、勤労奉仕に来ていた女子学生らも交えて、また 必ず会えますようにと祈りながら 歌われるようになっていったのです。

ここで歌った人たちが 戦争が終わった後も、それぞれの故郷に戻り、学校や職場、歌声喫茶などで、『中央の学生が歌った平和を祈る歌』として、更に広め続けたことから、『惜別の歌』は『中央大学の歌』とされ、広く長く歌い継がれて来ました。

この素晴らしい歌を作曲し、私達に残してくれた 藤江英輔先輩に深く感謝し、中央大学に学んだからこそ 皆で肩を組んで この歌が歌えるという誇りを胸に、

皆さん!! 箱根駅伝と共に 中央大学に学んだ者の絆を育んできた『惜別の歌』を、この会が終わるのを前に 声高く歌い、また必ず会おうと誓って別れようではありませんか!